

より満足度の高い JICAボランティア事業をつくりたい



JICA青年海外協力隊事務局
アジア・大洋州課

廣澤 仁

HIROSAWA Jin

大学卒業後、1999年に青年海外協力隊に参加。2004年にJICAに就職。国際緊急援助隊事務局・社会開発部(当時)、経済基盤開発部、バンングラデシュ事務所を経て、2011年9月から現職。

JICAボランティアの活動を支えるJICA青年海外協力隊事務局。廣澤仁さんは自らの協力隊経験と在外事務所での経験を踏まえ、受入国とボランティア双方の満足度を追及している。

協力隊参加を通じて 教員不足の背景を知る

大学卒業後の進路を考えていた時、街中で青年海外協力隊のポスターを目にした。世界には理数科の教員が足りない国がある。その事実を知り、理系大学卒という経歴を生かして貢献できることがあるかもしれないと、応募を決意しました。

派遣されたのは、ガーナ農村部の公立高校。現地の人々との暮らしや日々の授業を通じて、身をもって、学校や生徒を取り巻く現状を感じました。一家の期待を背負って進学してきた生徒たち。その真剣な思いとは裏腹に、基礎学力がとても低かった。その他にも、授業料が払えず退学になったり、家の手伝いで時間通りに通学できなかったり、病名が分からない病で命を落としてしまったり。生活インフラが整備されていない村での生活は厳しく、ガーナの教員たちにも敬遠されがちでした。「教員が足りない」という事情の裏側には、そんなガーナが抱える課題が凝縮されていたのです。この状況を改善するためには、問題の根源を探り、もっと包括的に改善していかなければならない。そこで帰国後、JICAの社会人採用を目指すことにしました。

在外事務所での再認識した、 JICAボランティアの輝き

4年半の本部勤務を経て、2008年にバンングラデシュ事務所へ赴任。廃棄物と飲料水にかかわる事業を担当しました。農村部では、飲み水の主な水源がヒ素に汚染され、住民たちの病気の原因になっていました。日本はこの分野で10年にわたってバンングラデシュ政府を支援してきましたが、関係省庁の能力強化、住民の啓発活動をさらに進める必要がありました。

この2つの分野で、両国が構築してきた住民による水管理のモデルケースを、現場のニーズにより合致するようカスタマイズできるのは、まさに草の根で活動するJICAボランティアではないか。現地政府と話し合いを重ねて、協力隊員2人の派遣が実現しました。

隊員たちはイスラムの風習や異文化に戸惑いながらも、現地語であるベンガル語を磨き、人々の信頼を得ながら、配属先やコミュニティの一員になっていきました。彼らが得る情報は豊富かつリアルで、人々を巻き込む行動力も素晴らしかった。協力隊に参加してから10年、JICAボランティアの強さとしなやかさを再認識し、事業のさらなる可能性を実感しました。

協力隊と在外事務所の経験を ボランティア事業でつなぐ

現在は、青年海外協力隊事務局で東南アジアを担当しています。この地域は協力隊員に加え、シニア海外ボランティア(SV)の派遣数が多いのが特徴。また、メンバーへのSV派遣開始や、民間連携ボランティアの第一号をベトナムに試行的に派遣するといったホットな動きもあります。私はJICAボランティア事業がより良いものになるよう、派遣計画の策定、制度改善などに取り組んでいます。

事業の主役はボランティア。彼らの満足度が高いほど、現地の活動の貢献度向上にも通じます。「貴重な人生の一部を捧げるのだから、多くのことを得て、多くのことを残してほしい」。私自身が、人生に大きな影響を与える経験をさせてもらったことその思いです。

協力隊と在外事務所、両方の経験を携えて、これからもより良い事業の在り方を目指して邁進していきます。



ガーナでの協力隊員時代



タイの援助機関でJICAボランティアの派遣について意見交換を行う廣澤さん(左端)